主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	李　筱硯

主 論 文 題 名：
平安時代の漢文学と仏教

（内容の要旨）

平安時代、漢詩文製作の担い手は主に紀伝道の文人儒者であった。彼らは自分を儒教の弟子とし、自らの振る舞いを儒家思想によって規定する。彼らは単に文章を書く専門家であるだけでなく、儒家思想の下で形成された律令制の官人でもある。しかし、儒教をこれほど受け入れた文人儒者たちは、儒教と相容れない仏教の行事にも屡々参加しており、釈教詩、釈教詩序、僧伝、願文、法会の記録など仏教関係の詩文製作にも携わっていた。儒家思想が提唱するのは立身出世、政事に積極的に参与することである。それに対して、仏教、とりわけ平安朝の文人儒者に大きな影響を与えた浄土教は、執着心の放棄、念仏の堅持を唱導している。儒教と仏教とは、いわば世の中に「入」るか、そこから「出」るか、真逆な方向に展開しているのである。儒家思想を立身出世の根本とした文人儒者ははたして、日常的にどのように仏教に向き合っていたのだろうか、これは本論文の問題意識であり、論述の出発点でもある。

平安朝の文人儒者と仏教との関係について、既に数多くの先行研究が存在している。先行研究のほとんどは宗教学・歴史学の視点から論じている。しかし、文人儒者等が執筆した釈教詩・詩序・伝記などは宗教史の史料であるだけでなく、文学作品でもある。このような作品がどのような構成方法で書かれていたのか、そしてどのように典拠・故事を駆使したのか、また表現上にはどういった特徴があるのか、一般的な詩文との相違点が見出されるかについては、未だ検討されていない。本論文は、平安時代を代表する文人儒者及びその仏教的作品を取り上げて、前述した文学の視点から文人儒者と仏教との関係について検討したものである。

本論文は三部十一章（うち二章は附章）から成り立つものである。以下、各部各章の梗概を示す。

主　論　文　要　旨

第一部では、平安前期を代表する文人儒者―菅原道真・紀長谷雄を取り上げた。

第一章では、菅原道真の四篇の「臨時仁王会呪願文」（『菅家文草』巻十二）に用いられる構成方法・典拠・表現について検討した。呪願文は仏事の場で作成・読誦される文体の一つであり、とりわけ平安時代の国家的行事の一環として屡々開催されていた仁王会においてよく作成されていた。寛平・昌泰年間の臨時仁王会で作成された呪願文の多くは、菅原道真の手によるものである。現存する菅原道真の四篇の「臨時仁王会呪願文」を詳しく分析した結果、道真は「臨時仁王会呪願文」において、①仏法僧を称賛し、②災害・兵乱など発願の背景を説明し、③仁王会の盛大な様子を描き、④兵事の終息・国家の鎮護などの「願望」を詳らかに述べるという一貫した構成方法を用いたことが明らかになった。典拠については、『仁王経』を始めとする仏教経典だけでなく、儒教典籍など様々なものから疫病・災害調伏の方法を求めていた道真の姿が確認できた。また、表現の上にも、天皇の代替わりに応じて表現を変えたり、偈文的な文型を使用したりした道真の工夫をも明らかにした。

第二章では、神仙と仏教との融合の面から、紀長谷雄の「白箸翁」詩序を再検討した。「白箸翁」詩序では、姓名も出自もわからず、白箸を売るのを業とする長寿不老の翁が、ある日突然に病死してしまったものの、二十年後蘇ってきて、石室の中で香を焚きながら『法華経』を誦読していた話が描かれている。この作品は従来、典型的な神仙譚と見なされてきたが、詳細に検討した結果、実は仏教的な要素も数多く混在しており、法華霊験譚と見做すのが適当であることを指摘した。一方、著録者の長谷雄も含めて、多くの人々が神仙譚と見做したのは、当時の神仙趣味の流行及び神仙と仏教との融合がかなり一般的な事象であったからだと結論づけた。

附章一では、第二章で言及した「源能有五十賀屏風詩」と関連性を持つ新資料『上代様草書手本』を紹介した。白居易の詩、菅原道真の詩及び逸文からなる本書の性格を、その三つの部分に分けて詳しく検討した。その結果、『白氏文集』の唐鈔本系統の本文の一例を提供できる点や、菅家詩文の本文の校訂に利用できる点、橘在列作の可能性のある逸詩を見出した点において、資料的な価値の高い資料であることを明らかにした。また、附録として本書の全文を翻刻した。

第二部では平安中期の僧俗両道の結社、勧学会について検討した。勧学会とは、康保元年（九六四）に創始され、毎年の三月と九月の十五日に大学寮の紀伝道の学生と叡山の僧侶とが結縁して、一堂に会し、互いに詩文と仏法とを修学する会のことである。仏教と漢詩文を一体化し、一五〇年以上断続的に続いた勧学会は平安時代の漢文学と仏教との関係を研究するのに最適なものである。

第三章では勧学会に関する基本的な事項を整理した。まず、勧学会の初めての集会は従来指摘されていた康保元年三月ではなく、同年の十一月十五日に行われたと指摘し、先行研究の結論を修正した。次に、桃裕行の説を援用して、三期に分かれる勧学会の概要を述べた。すなわち、第一期勧学会は康保元年から寛和頃まで、第二期は寛弘頃、第三期は長元頃から保安頃までに分けることができる。また、勧学会の道場、歴代の参加者、行事内容も現存史料に従って整理した。初期勧学会は親林寺・月林寺など様々な寺院を借りて会を運営したが、第三期の後半になると、六波羅蜜寺にほぼ固定したことを明らかにした。また、初期勧学会では紀伝道の貴族も僧侶も積極的に参加していたが、後期になると、紀伝道出身者、特に既に出世した「先達」の儒者が中心となり、僧侶の参加者は少数しか確認できていないことを究明した。行事内容については、「講経・念仏・作詩」は草創期から最後まで続いたが、本来一日二晩であった会期は後期になると半日に縮小し、特に講経・竪義・念仏など仏教的な行事が短縮されたことも明らかになった。最後に、勧学会の性格や影響についても詳細に論述した。勧学会では「内外勧学」が主旨になっているが、僧侶は作詩を行わないため、内典である仏典及び外典である詩文を共に学ぶのは俗人側の参加者のみであったことを指摘した。また、勧学会を模倣した集会や仏典の内容に基づく釈教詩が続々出現したことから、勧学会が平安貴族社会に与えた影響についても検討した。

第四章では、勧学会で作られた経句題の詩の構成方法や典拠・表現などを詳細に分析した。まず、経句題の詩の構成方法と句題詩のそれとを比較した。句題詩については、近年大きな研究の進展を見せており、以下の構成方法に従って作成されていたことが既に明らかになっている。即ち、七言律詩の句題詩の首聯では、詩題の字をそのまますべて用いて題意を表す。これを「題目」という。頷聯では詩題の字を用いずに、それらの

字の類義語あるいは連想語などを用いて題意を表す。これを「破題」という。頸聯では詩題の字を用いずに、それらの字を比喩的にあるいは故事を用いて、題意を表現する。これを「本文」という。尾聯では、詩会に参加した感慨・心情を述べる。これを「述懐」という。経句題の詩と句題詩とを比較した結果、経句題の詩も、句題詩と同様に、七言律詩が主流で、各聯がそれぞれ題目・破題・本文・述懐の機能を果たしていることが明らかになった。ただし、勧学会の中心人物である慶滋保胤は、句題詩にめったに見られない特殊な破題の方法を使用していることも確認できた。典拠と表現の使用にいたっては、内典は勿論であるが、『白氏文集』などの外典に典拠・表現を借用する事例も多く見受けられる。

第五章・六章では、菅原定義と藤原敦宗が第三期勧学会において作成した経句題の詩序の構成方法や典拠・表現などについて検討した。第四章と同様に、これらの経句題の詩序の構成方法を句題詩序のそれと比較した。その結果、定義詩序も敦宗詩序も第一期、二期のそれと同様に、三段落に分けられ、それぞれ背景の説明・破題・述懐の機能を果たすという句題詩序の構成方法に従っていることが明らかになった。また、典拠と表現の使用上において、二つの詩序で趣向がやや異なっていることをも指摘した。定義のほうでは積極的に外典から故事・表現を文章に取り入れたのに対して、敦宗のほうでは、法華経のみならず、天台仏教の法華経注釈書や『仁王経』など様々な内典が利用されている。加えて、定義詩序には第一期、二期勧学会結衆が執筆した詩序からの影響が見て取れるが、敦宗詩序においては、それはほぼ確認できず、逆に定義詩序からの影響が確認できた。

第七章では、勧学会の中心的な存在である慶滋保胤の狂言綺語観について再検討した。出家前、保胤は今生の狂言綺語の詩作を来世の仏縁に転じたいという白居易の狂言綺語観を継承したにも拘わらず、両者では風月詩に対する態度が明らかに異なっていることを明らかにした。白居易は主として風月詩を来世の仏縁に転じられるものとし、肯定的に取り扱っている。それに対して、保胤は讃仏詩と風月詩とを分けて考えており、讃仏詩こそが来世の仏縁に転じることができるものであり、讃仏詩が風月詩と同列に見なされることを嫌っていた。保胤の風月詩に対する否定的な態度は白居易のそれとは大きく

異なっており、勧学会の他の結衆、とりわけ紀斉名、高階積善には見られないものである。出家直後、保胤が出家前の狂言綺語観の一部を継承し、仏教の視点から風月詩に対する厭悪感を憚りなく顕然と示していたことも明らかになった。保胤は一時期、「賽菅丞相廟願文」や「起請八箇条」のような法会開催のための願文・起請文を起草し、仏法のために文才を発揮したが、それはやはり出家直後に留まり、それ以降保胤による詩文は見られず、完全に断筆したと推測した。

附章二は、「待詔金馬門」という中国の古来の表現がいかに平安朝漢詩文の世界で受容され、そして変容したかについて、検討したものである。金馬門は中国漢代、文士の出仕する場所であり、班固「西都賦」（『文選』巻一）などによると、著述・作文の場と見なされていたという。金馬門で天子の詔を待った文士のうちには、文事に従事する人物が存在する一方、諫臣としての職能も持ち、上疏もしくは下問の際に、帝王ないし官吏の得失を言い、罪過を諫める人物もいたのである。「待詔金馬門」には「文学」・「諫言」という二面性が備わっていることがうかがえる。唐代の白居易の詩文においても、それと同様な傾向が見て取れる。一方、日本の平安朝の漢詩文において、「待詔金馬門」に類する表現は、文人学士の宮中への出仕を意味し、文才が認められた一面のみが強調された。対して、中国漢代の文人及び白詩において「待詔金馬門」といった表現に内在していた諫言・下問の一面は受容されることがなかった。これは、平安中期以降の文人の政治状態、すなわち諫臣ではなく、詩文を制作する職業文人であるという立場と関わるものと思われる。また、大江朝綱の漢詩文においては、「待詔金馬門」が対策及第と組み合わされて用いられ、公孫弘の金馬門待詔の故事が、殊更に受容されている。しかし、平安中期以降の対策は公孫弘の時代のそれとは性質が異なり、漢故事の知識を問うのが主眼になり、天皇に献言するといった実用的な効能は極めて乏しい。朝綱が公孫弘の対策及第並びに金馬門待詔といった故事を積極的に受容し、文人の果たし得る役割を強調しようとしても、儒者の政治への参与が制限されるなど現実的なジレンマに苦しみ、公孫弘等のように諫官として働くことはできなかったといえる。

第三部では、『擲金抄』仏法部の釈教詩句を取り上げて検討した。『擲金抄』は、鎌倉初期に紀伝道の儒者藤原孝範によって編纂されたとされる対句語彙集である。巻中と下の残簡しか現存していないが、そのうちの仏法部には、三〇〇首以上の釈教詩句が残存している。これらの釈教詩句の多くは平安中後期の文人貴族の手によるものであり、未だ本格的な研究が行われていない。第三部では、そのうちの「讃十斎仏」及び「十楽」の詩句について検討した。

第八章では、経政の「讃十斎仏」詩句について検討した。十斎仏信仰は平安鎌倉期の貴族社会に定着していた仏教信仰の一つであり、「十斎日」と密接に関わっている。十斎日とは毎月斎戒を保つように定められた十日間のことである。具体的には、毎月の一・八・十四・十五・十八・二十三・二十四・二十八・二十九・三十の各日であり、小月の場合、最後の三日は二十七・二十八・二十九となる。それぞれの日に配当された仏菩薩を十斎仏という。しかし、中国では、十斎日の仏菩薩の配置は統一されておらず、また日本に現存する資料のそれとも相違が見受けられる。経政の「讃十斎仏」詩句における十斎仏の配置を検討した結果、藤原道長の十斎堂及び高陽院十斎講と最も近いことが明らかになった。したがって、この詩句も文人貴族が参加した法会において披露されたものと推測される。また、十首の詩句のうち、「定光仏」詩句、「薬師如来」詩句及び「観世音菩薩」詩句においては阿弥陀仏及び阿弥陀仏の縁日である十五日の言及があることから、この詩句は十五日、阿弥陀仏の念仏を中心とした法会で作られたものと推定した。

第九章では、「十楽」詩句の作者、制作環境、典拠、表現について検討した。また、十楽歌と十楽詩句との比較も行った。その結果、『擲金抄』所収の十楽詩句の作者は藤原為房一族の人あるいは彼らと親交のある文人儒者であることが明らかになった。また、十楽詩句は『往生要集』に限らず、『観無量寿仏経』や『法華経』『華厳経』などの仏教経典にも典拠を求めており、表現の面では、内典のみならず、外典にしか用いられない詩的表現も利用されたことを明らかにした。十楽歌にも同様な傾向が見受けられる。

主　論　文　要　旨

平安前期から後期まで、通時的に漢詩文と仏教との関係を検討した結果、前期にせよ、中後期にせよ、いずれの文人儒者も仏教と儒教と、内典と外典とを融合する道を選んだことが窺われる。平安前期、菅原道真は儒家思想を仏事の場で作られた呪願文に融合し、紀長谷雄は仏教的要素が混在していた神仙説話を実録した。儒・釈・道という三教の融合・混成が彼らの作品には確認できる。平安中期になると、慶滋保胤をはじめとする中下級文人は、積極的に叡山僧と交流し、仏法と詩文との融合を試みた。勧学会の詩文を検討した結果、中に外典の故事や詩歌的、比喩的な表現が多数見出されることが明らかになった。内典と外典との融合が彼らの詩文に現れているのである。また、『擲金抄』所収の釈教詩にも同様な傾向が確認できる。

一方、平安前期の仏教関係の漢詩文と中後期のそれとの間には相違点もある。前期と比べて、中後期には釈教詩文の題材がより豊富になった。前期では『仁王経』や『法華経』などに集中していたのに対して、中後期では、『法華経』のほか、『最勝王経』『無量義経』『普賢経』『心地観経』『大般若経』『般若心経』『阿弥陀経』『仏名経』『阿含経』『浄名経』『倶舎論』など様々な経典が詩文の題材になった。また、中後期の漢詩文における内典の使用方法も前期と比べ、より多様化しているのである。中後期の詩文では、『法華経』や『仁王経』『観無量寿経』などの仏教経典に限らず、『法華玄義』『法華文句』などの天台仏教の法華経注釈書や善導の『法事讃』など、中国撰述の仏書が利用されたことも確認できる。そのほか、空海『大日経開題』や源信『阿弥陀経略記』など日本撰述の仏書から表現の借用も確認できる。

以上、本論文では、平安時代の漢詩文と仏教について、代表例を取り上げながら、詩文の典拠・表現の使用など、多角的に検討してきた。これにより、平安時代における漢詩文と仏教の関係の一端を明らかにすることができたと考える。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	LI XIAOYAN

Title of Thesis:

Kanbungaku and Buddhism in the Heian period

平安時代の漢文学と仏教

Summary of Thesis:

This thesis presents a selection of Buddhist-related works by representative literati of the early and mid-to-late Heian period, analyzing their structure, use of allusions and diction in order to clarify how the literati of Heian Japan, who were heavily influenced by Confucianism, confronted Buddhism, which was at odds with Confucianism.

In the first part of this thesis are discussed the works of two major literary figures of the early Heian period, Sugawara no Michizane(菅原道真) and Ki no Haseo(紀長谷雄). I find that Sugawara no Michizane used not only Buddhist texts, but also Confucian texts and folk beliefs as the basis of his prayer for national peace and prosperity in his four "Special Ninnoe Juganmon(臨時仁王会呪願文)". Meanwhile, Ki no Haseo recorded a story which unified the immortals with the Buddhists in "Hakuchoo(白箸翁)" and fused the Taoist idea of the immortals with the Buddhist image of the holder of *The Lotus Sutra*(法華経). This idea of the unification of the immortals and Buddhists is also found in the works of Sugawara no Michizane and Miyoshi no Kiyoyuki（三善清行）,which proves that it was common in the Heian period.

The second part of this thesis dealt with the problems related to the monks and laymen's association movement "Kangakue（勧学会）", which lasted for 150 years in the middle and late Heian period. It was held in March and September of each year, and was attended by 20 literati and 20 monks from Hiezan(比叡山). After lecturing on *The Lotus Sutra* and reciting the Buddha's name, the literati wrote poems based on a verse chosen by the monks from *The Lotus Sutra*. Kangakue was the first event to combine poetry with sutra lectures. I analyze the poems and poem prefaces written by Kangakue literati. The result shows that the composition method of these poems and poem prefaces was the same as what usually used in the kudaishi(句題詩) and kudaishijo(句題詩序). That is, they sought to integrate Buddhism and poetry in form and content. In addition, I pointed out that the classical allusions and words used in these poems and prefaces are not limited to the Buddhist scriptures（内典）, but the common metaphors and allusions of non-Buddhist writing（外典） can also be found in them. Therefore, it can be said that the Kangakue and its poems achieved the fusion of poetry and Buddhism.

In the third part, I select two groups of verses labelled as "Praise for the Jūsai Buddhas（讃十斎仏）" and "The Ten Delights（十楽）" from the Buddhist section of *Tekkinshō*（擲金抄）for analysis. The idea of fusion mentioned above can also be found in these two groups of verses. Furthermore, these two groups of verses have more distinctive features in terms of allusions and words. In addition to the use of Buddhist scriptures such as the *Lotus Sutra*, Chinese commentaries about Buddhism, such as the *Profound Meaning of the Lotus Sutra*（法華玄義）are also used. Even the influence of writings by Japanese monks such as Kūkai（空海）and Genshin（源信）can be seen in these verses.

In summary, this thesis discussed how the literati of the Heian period fused Confucianism, poetry and Buddhism from the perspective of literary studies. It is expected to be useful for the study of kanbungaku in Heian literature.